

平成 30 年度厚木市民文化祭
県央史談会史跡めぐり

一金田・下依知・中依知方面の史跡を訪ねて一

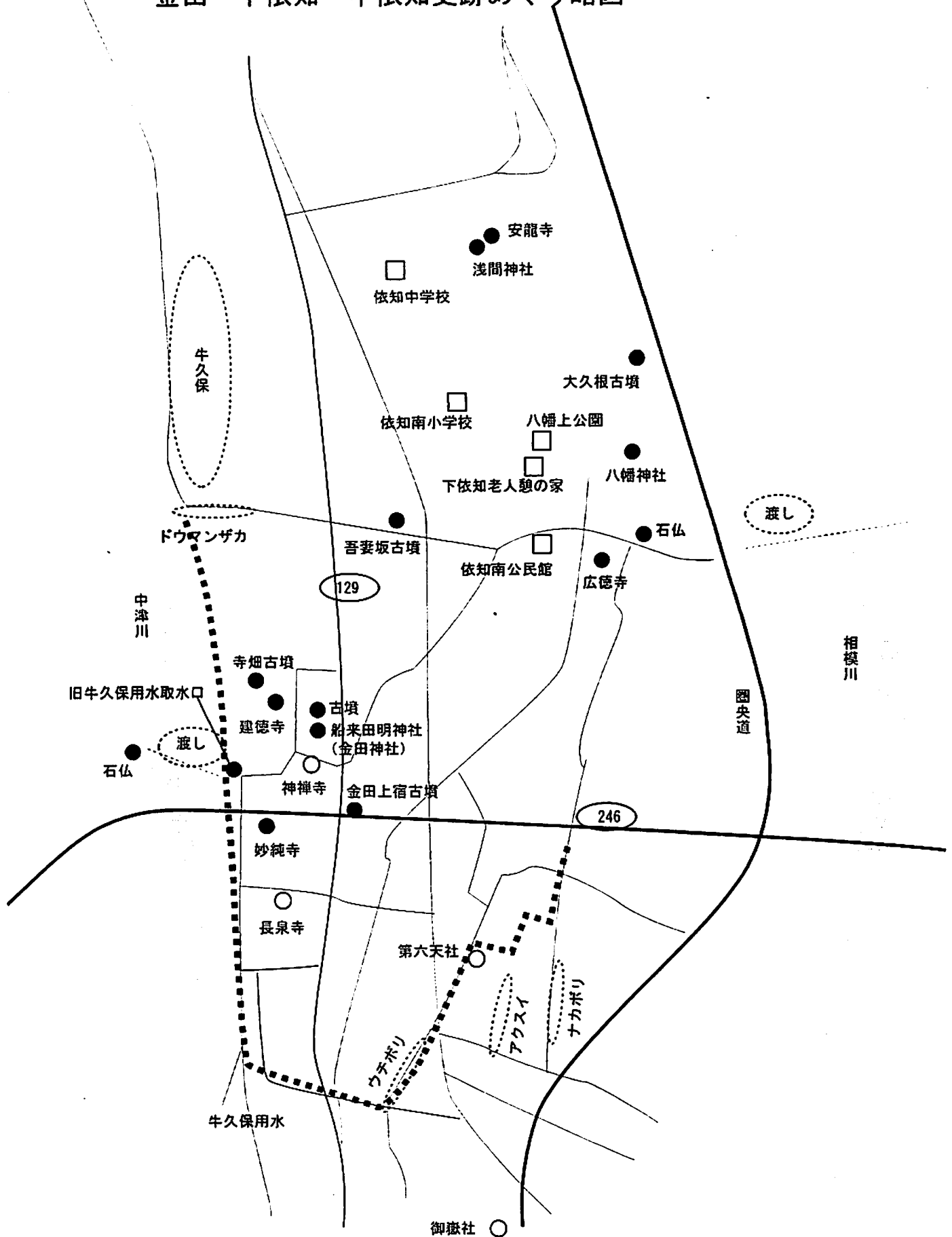
平成 30 年 10 月 28 日 (日)



錦絵 高祖御一代略図の内「九月十三夜依知星降」 日蓮の行状記 10 枚揃いの
うちの一枚、歌川国芳、天保 2 年 (1831) 頃 (『依知の歴史資料展』)

めぐりコース キフネサン～妙純寺～建徳寺～金田神社～吾妻坂古墳～
巡礼道石仏～浅間神社～大久根古墳

金田・下依知・中依知史跡めぐり略図



金田村

支配概略『皇国地誌』 頼朝、毛利季光、北條、本間、北條高時、朝廷、足利尊氏、基氏（管領）、持氏、成氏、顯定、定正、氏綱・長綱（幻庵）、徳川、小河三益（東分）、間宮次郎兵衛（西分）、西分上知代官成瀬吉右衛門の後興津越中守、葦山県知事江川英龍

甲陽軍鑑品第三十五 永禄十二年（1569）十月七日、設楽越前父子物見にいで、かね田のうしろ谷の上より静に物見を仕る、甘利衆の覺の武士八騎、米倉丹後守・江田加賀・田中淡路・井上文左衛門・水野四郎右衛門・佐々木十左衛門・木内六郎左衛門・青木弥惣左衛門、此八人馬をはやめて中津川を乗こし、牛飼と云所へ坂を乗あげ候を見て、設楽越前守親子馬をはやめてにげ候

近世 旗本小河氏と興津氏の二給村落。村高は六四三石一斗九升四合、戸数八六。神社は村鎮守の船来田明神社とその末社の秋葉社・稲荷社・天満宮の三社。他に御嶽社・第六天社。寺院は妙純寺（日蓮宗）、建徳寺（臨済宗）、長泉寺（臨済宗、廃寺）、靈光院（臨済宗、廃寺）、神禪寺（当山修験、廃寺）。

「明治三年十二月金田村明細帳」、家数は九十九戸で平民が九十五戸、神主一戸、寺院三戸。人別は男三百十人、女が二百八十三人、合計五百九十三人。

間宮領 家紋は四目結 割菱 信正、正次、信重、信茂、某（善太郎 傳左衛門）、某（虎之助）元禄十三年三歳で没。絶家。このうち信重（次郎兵衛 信正次男）が相模国愛甲郡のうちに二百石を賜う。元禄三年卒。この墓が妙純寺に現存。右側面に「当地頭間宮次郎兵衛尉」、正面に「妙法 覺玄院殿顕了日登大居士 元禄三庚午年十一月十三日」



間宮信重墓碑銘

興津領 宗能（相模・武蔵・下総五百三十石、寛永十年（1633）埼玉郡に二百石加増）、忠閣（たたと）（宝永二年（1705）相模国愛甲、下総国で千石加増）、享保九年（1724）甲府勤番支配、翌年大目付、忠通、忠真、忠美。墓所は四谷（東京）の法蔵寺。

天保十四年（1843）興津領十二か村郷村高帳（『市史村落2』） 興津健之助 武蔵国埼玉郡・榛澤郡、上総国望陀（もうだ）郡、下総国豊田郡・葛飾郡と相模国愛甲郡の内の十二か村、金田村高二百七十四石七斗九升四合九勺、戸室村高二百四十三石一斗六升、七沢村高三百三十七石四斗八升七合四勺。

文政九年（1826）九月 興津領十か村先納金日延べ請書（『市史村落2』） 金百五十両の内百両は今回上納するが、残り五十両は困窮の村々調達できず、十月まで日延べ願いたい。

年貢の先納とは、正規の期日以前に年貢を納めることをいう。年貢の先納は、近世中期以降の旗本領においては一般的に行われているが、村にとっては生産物を収獲する以前に金子を調達しなければならないので、より負担の増加となる。年貢の納入というものは一年分の年貢をまとめて一度に納入するのではなく、夏成金・秋成金として季節ごとに納入する以外に、特に旗本領の場合は月割金として一カ月ごとに納入するという事例も見られる

長泉寺 建徳寺末で開山は久翁玄昌（寛文十二年（1672）三月四日卒）で、建徳寺中興十四世。妙純寺縁起には本間重連娘（おば）の尼の寺でその墓が遺るというが不詳。本尊は薬師（『風土記』）。

「長泉寺由緒書上」寛保二年（1742） 東光山長泉寺は本間重連娘母（いぼ、母の姉妹をいう。父の姉妹は姑（こ）という）長泉院殿の草創で、愚翁和尚（建徳寺三世、二世延元二年（1337没）四世応永三十年（1438）没）の道場。

金田字並木の五輪塔 凝灰岩製（三浦層畔の池子層の凝灰質砂岩、鎌倉期。火山から噴出された火山灰が地上や水中に堆積してできた岩石。『皇国地誌』は「本間忠家之室久我氏之墓」村の西北字並木の林中にあり亦五層の石浮屠（いしふと、ふとは塔）にて文字なし、里人の口碑に久我氏は木舟の方と称す、久我大

納言の妹にして、本間重連の生母という、法号は長泉院殿大善悟庵大禪定尼、永仁五年(1297)丁酉二月九日卒す、靈碑建徳寺にあり。

『市史史料集(2)』は長泉寺は重連が亡母きふねの菩提供養のため建立。伝承によれば母が懷妊のまま亡くなったので母子供養として木船社を祀り、地域では出生児の發育を祈り、千羽鶴が多数納められている。

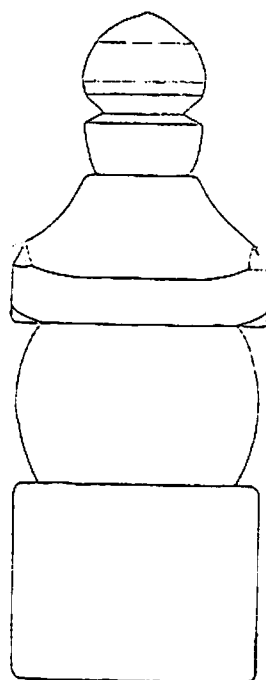
奉納木札 ①(表)文化八年二月 奉請資布祢大明神鎮座 別当神禪寺 (裏)施主 飛鳥田重左衛門・仁右衛門・一同 ②(表)願文不明 貴船大明神擁護 (裏)明治二十九年七月二十一日 祈禱者 中山社長野村光珍 祭主飛鳥田近太郎『小祠・小堂』

円形、宝珠に近い

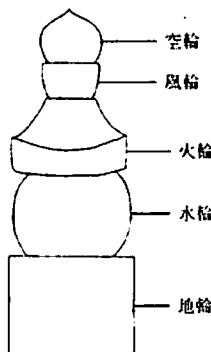
皿形、薄い

軒の厚さが中
央・端部が同じ、
勾配が緩い

上下切り落とし、
中央最大径



総高	1.295m
地輪高	38.0cm
水輪高	31.0cm
火輪高	29.0cm
風輪高	10.0cm
空輪高	21.5cm



牛久保用水 「明治三年十二月金田村明細帳」 以樋は中津川通り牛久保下に長さ四間(7.2m)、横六尺五寸(1.95m)、建徳寺下に長さ二間四尺(4.8m)、横七尺(2.1m)あり。①(石祠)昭和四十四年五月一日建之 金田道路委員会 ②(日形石柱)延享二年乙丑三月日 ③(石祠)寛政九年巳十二月吉日 当村惣氏子(現在なし) ④昭和十五年四月一日完成の牛久保用水樋門改修刻銘(『野たち』『用水』『小祠・小堂』(図1))

「堰川除堀割浚目論見帳」 天保十三年(1842) 慶応二年(1866) 「一番

用水入口川巾凡四拾間余」「二番用水入口」「三番樋口」、一番堀割長五拾八間深サ凡壹尺巾四間、二番堀割長三拾間深サ六寸巾三間、三番樋口堀割長拾御五間深サ一尺五寸巾三間、蛇籠、内堀浚二百九十人(『用水』)

妙純寺 明星山、無本寺、開山は日蓮、開基が日善(正慶元年(1332)九月二十二日寂)、中興が日瑠(貞享三年(1686)一月十五日寂)、本尊は三宝尊と日蓮。三宝尊は仏・法・僧の三宝を祀るための仏像で形態はいろいろあり、一塔両尊は宝塔に南無妙法蓮華經と書かれた題目宝塔が中央にあり、その左右に釈迦如来・多宝如来の二仏を配置。題目宝塔と二仏は、一基の須弥壇に配置することが一般的。

宝塔(図2) 本間重連の供養塔という。16世紀末頃

天保十一年(1840)二月 妙純寺星下略縁起(『市史社寺』(略解)) 妙純寺は本間六郎左衛門尉重連の旧跡で、日蓮大菩薩星下御霊梅の道場である。文永八年(1217)九月十二日高祖を片瀬竜口に引き連れ、直重が首を刎ねようとしたところ、天地鳴動して江の島の方から満月のような光物が飛行した。直重はたおれ刀は折れ鎌倉殿中にも奇怪があり難を逃れた。幕府は日蓮を重連に預け翌十三日屋敷へ入らせた。直重は深く帰依し浄観坊日賢となり弟子となった。重連も帰依し後に宅地を寺とした、妙純寺である。御書に曰く、日蓮十三日夜庭に出て満月に向い自我偈、法華經文をよみ、月天月天自分がこのような難局にあたっているのに何のお助けもないのはどういふことなのかと月天を責めたところ、天から明星のような大星が梅の木の枝に降り、武士は仰天しやがて空がかき曇り大風が吹いて雷鳴がとどろいた。この様子を見て重連を始め一同の者は奇異を感じ念仏をなげうち改宗した。元弘元年(1331)の春重連の遺命により梅樹の傍に居宅を転じ堂宇を造営した、これが妙純寺である。日善上人により開堂供養が行われ日蓮を開祖とし、日善は明星降臨の後世に伝え広宣流布のため高祖尊像を彫り天拝日蓮大菩薩と称し祀った。大猷院家光も霊梅の崇敬篤く慶安二年(1649)御朱印寄附し霊梅守護を命じた。当山重連の館というのは明らかで、寺の境内を堀之内といい桜の馬場堀口などと呼ぶ。

蓮生寺 日蓮を開山とし、蓮生房日永を開基とする。日永は本間六郎左衛門尉重連、永仁四年(1296)四月十九日死、村内梅香寺は本間重連の屋敷にて、文永八年日蓮止宿の時庭上の梅樹に大星下りし旧跡なりと云へど信用し難き所あり。

妙伝寺 『風土記』は、寺地もと本間六郎左衛門尉重連の宅地なり、文永八年九月十三日重連の弟三郎左右衛門直重宗祖日蓮を龍ノ口より当所に伴い来り重連が邸中観音堂に居しむ、(中略)、弘安元年九月僧日源彼星下梅樹の傍に草堂を営み、本間直重の需に応じ僧日法彫刻ありし宗祖の像を安ず、その後日蓮を請待開山とし重連(金城石山居士、文永九年(1272)三月七日死)、直重(置法、没年不明)兄弟を開基として一寺とす。

妙伝寺略縁起 文永八年(1271)九月十三日に依智三郎左衛門直重御案内もうして刀鍛冶の鈴木弥太郎宅へ御入御休足あり(座間村の円教寺)それより本間重連の家舗にいらせ給う。

日蓮書状 文永八年九月十三日『市史中世資料編』、武蔵守(大仏宣時)殿御あずかりにて、十三日鎌倉を出て佐渡の国へ流され候か、当時はほんまの依智と申すところにえちの六郎左衛門尉殿代官右馬太郎と申す者預りて候か

出開帳 妙純寺、妙伝寺ともに江戸で出開帳を行っている。妙純寺は宝暦九年(1769)、享和二年(1803)、文政十一年(1828)の三回、また妙伝寺は延享二年(1795)、寛政九年(1797)、文化十四年(1817)の三回。

日蓮上人一代図会(図3) 近藤如水画、万延元年(1860)四月 日蓮の生涯を十六図二枚の板に描く、佐野市右衛門(市郎右衛門)の奉納。市右衛門は後改め市郎、俳号魚眼。曾祖父市郎右衛門邑明は俳号正二(文化五年四月二十九日、六十五歳没)、祖父久馬輔(嘉永元年四月六日、七十六歳没)は俳人五雲井槐堂。

近藤如水(藤原隆秀) 文化元年(1804)〜文久二年(1862)八月十三日、五十九歳。大住郡坪ノ内村名主八代小左衛門の次男、九代小左衛門(幼名亀之助、伊勢原町勢誌では亀太郎)の弟で幼名金吾。七歳で父、九歳で母を亡くす、地頭小幡又十郎(本貫地は中依知)の後援を受け十五歳の頃江戸に出て土佐派の

絵と漢学を学ぶ。天保八年(1837)上京し仏画と人物画を研究、各地を歴訪し甲州では三年ほど滞在し漢方医学を学ぶ。天保十三年、十四年頃帰郷し地頭より苗字帯刀、一人扶持を与えられ、藤原隆秀と改名し舟霞斎と号した。坪ノ内の墓所には正面硯を模し側面に筆を陽刻した墓石がある。「天性院如水隆秀居士」作例 坪ノ内長福寺と河原口有鹿神社の八方睨みの龍図、善波三島神社佐々木高綱と梶原景季の宇治川先陣争いの図、下川入佐野家源氏物語図、上野寛永寺仏画(焼失)、興津清見寺格子天井百人一首図、近藤家のうずらと稲穂図『伊勢原町勢誌』、『いせはら史跡と文化財のまち』、『神奈川県史人物』、『伊勢原市史近世通史編』、『市史文化・文芸』

題目碑 享保十六年(1733)九月十三日 宗祖四百五十遠忌 「本願主坂東彦三郎 法名鶴樹院常栄日芳 父自性院本是日實 母本性院妙是日體 妻松樹院栄寿日持」 初代坂東彦三郎建立

三代目坂東彦三郎建立墓石「元祖坂東彦三郎墓」寛政六年(1794)九月十三日 明治二年金田村の芝居興行 小園村金子重兵衛日記には、明治二年(1869)「厚木町大芝居これあり、猿若町千両役者参る」「金田村大芝居これあり、千両役者参る」「大谷村右同断」がある。他に明治二年七月「金田村芝居興行諸勘定帳」があり、六月晦日から七月十日まで金田村で催された芝居の勘定帳がある。裏表紙に「戊七月廿五日 星降明星山妙純寺」とある。初代坂東彦三郎(四代目坂東彦三郎)、尾上菊次郎(若女形名優)などの名がある。他に中山毎吉の書簡に見る金田妙純寺での彦三郎追善興行(天保末から嘉永初)、柏木喜重郎氏父の話もあり、金田妙純寺での彦三郎関連の興行があったことが知られる『市史民俗2』。

江戸期の宝篋印塔二基 ①日窓上人禅尼 御本丸手塚氏秋野 ②蓮生院日妙禅尼

建徳寺

建徳寺は金田山、臨済宗建長寺末、開山は、大興禪師葦航道然大和尚（正安三年（1301）十二月六日卒）、開基は本間六郎左衛門尉重連、末寺は長泉寺、靈光院。墓所に本間氏の墓という二十八基の石塔あり（図4・5）。慶安二年（1649）八月二十四日家光より寺領十石の御朱印を賜う。本尊釈迦如来。明治三年（1870）の金田村明細帳では、元朱印地十石の反別が一町八反五畝歩で田が高一石五斗反別一反五畝歩、畑が高八石五斗反別一町六反歩となっている。

木像地藏菩薩立像（図6） 南北朝か室町初。像高35.5センチ。

木造大興禪師座像（図7） 開山大興禪師葦航道然頂相という。像高50.4センチ、室町。

小河氏 慶応二年（1866）先祖書（『市史村落2』）

清和源姓 小河氏 家紋は尾長鳥一對、替紋は隅入角之内一文字 伊予守頼義後胤、伊勢国北山家代々居城、小河修理亮頼繁嫡男小河丹波守頼久次男

先祖 本国生国 伊勢 小河三益 能書により天正八年（1580）正月十五日家康初お目見え御奉公となる。新規知行相模国愛甲郡・大住郡之内、下総国葛飾郡の内で五百石給地あり。慶長十一年（1606）八月十七日病死。

二代目 生国武蔵 三益惣領小河惣左衛門頼勝 秀忠の代に召出され、寛永四年（1627）御金奉行、日光御社参り御上洛にお供し二十三年勤める。明暦二年（1656）二月二十八日病死。

三代目 生国武蔵 頼勝惣領小河惣左衛門頼清 家光の代寛永十三年御目見え、家綱の代御小姓組松平信興組、元禄二年（1689）九月十一日病死。

四代目 生国武蔵 養父頼清、実父神谷八右衛門教重次男小河惣左衛門常重 元禄十年（1697）十一月葛飾郡に知行所、大住郡沼目村・飯嶋村加増、宝永三年（1706）四月六日小普請大久保玄蕃組、六年（1709）四月十九日病死。

五代目 生国武蔵 常重惣領小河甚左衛門茂昭 綱吉の代享保九（1724）年十一月十一日甲府勤番興津能登守支配与頭、享保十二年（1727）閏正月二十日病死。

六代目 生国武蔵 養父茂昭実父横山主殿言知三男小河惣左衛門益胤 吉宗の

代享保十二年養父跡継甲府勤番、享保十六年（1731）帰府、延享二年（1745）六月九日病死。

七代目 生国甲斐 益胤惣領小河甚左衛門益親 延享二年八月二十日跡継、甲府勤番久留嶋出雲守支配、安永二年隠居剃髪露牛と改名、文化八年（1809）十二月五日病死。

高祖父 生国甲斐 益親惣領小河惣左衛門益利ますのり 甲府勤番文化四年（1807）三月二十六日隠居、五年十一月二十日病死

曾祖父 生国甲斐 益利惣領小河兼太郎益次 家斉の代小普請組久貝忠左衛門支配文化四年三月二十六日隠居跡継、文化十三年（1816）三月二十九日隠居、剃髪寿楽と改名、天保三年（1832）十一月二十一日病死

祖父 生国武蔵 兼太郎惣領小河惣左衛門益廣 小普請組近藤左京支配、天保

十二年十二月八日隠居、剃髪龜楽と改名、安政五年（1858）八月二十日病死

父 益廣惣領小河惣左衛門益新 文久三年（1863）正月二十日八木但馬守組の節二月六日江戸出立御上洛御供先遣、二条城勤番、六月十三日大坂より帰府、文久三年十二月十九日御上洛御供先遣、文久四年正月十五日二条城御供元治元年（1864）五月二十七日帰府

小河亮太郎

万延元年（1860）八月 建徳寺新規墓地寄付金等伺書

純行院 小河益利 寒心院 小河益次 常光院 小河益廣 靈泉院

小河益親 名主飛鳥田幸左衛門と名主見習与左衛門から、小河家用人とみられる豊田市蔵、杉浦忠兵衛へ宛てたもので、建徳寺内新規墓石の造立に当たり寄付金の申出と墓石裏面への名前等の刻銘の再確認、村内寄付者の名前を記すようにとの達しにより名前を報告。新墓開眼と法事を一同に修したいがどのように取り計らったらいいか。玉垣へ寄付者の名前を記すことを許されたがどのようにしたらいいか（『市史村落2』）。

万延元年（1860）八月 小河家墓地石屋手間請取覚（『市史村落2』）（図8・9・

10） 厚木石屋忠次郎の請取 石塔代は金三兩二分 塔身・基礎は伊豆小松石、台石は所石とあり、所石は七沢石か。

文久三年五月 益新家内非常時金田村建徳寺立退き願書『市史村落』 この
年三月四日家茂は上洛し二条城に入る。上洛にお供した益新の家内、家来妻子
について、非常時の時建徳寺へ逃げ込むことを決めた願書。

文政八年(1825)十二月 地頭小河氏妻田村奎左エ門から借用金年賦証文『市
史村落』 金二百五十両 享和三年(1803)から文化十四年(1817)までの
先納金

天保五年十一月小河領相模国四か村違作御救金請書『市史村落』 天保飢饉
に対する御助米や下げ金十五両があった。

盤光院 建徳寺末、『風土記』では開山は本寺十七世貞享二年(1685)三月十日
卒の溪山玄義、本尊は観音。

本間氏『続群書類従』『姓氏家系辞書』

武蔵「春日氏族、海老名氏流」

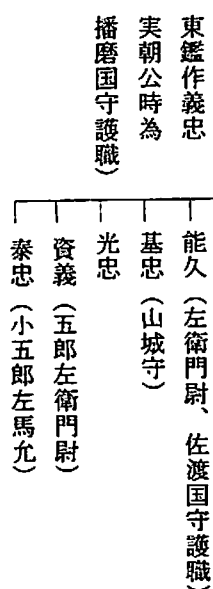
○本間系図「為平親王―顯定―資定―有宗―有兼―基兼(海老名源太郎、母横
山権守女)―季定(吾妻鏡に季貞)―能忠(号「本間」、住「播磨」、母横山権守
女)」。佐渡本も同じ。

○浅羽本「顯定―資定―有宗―有兼―季兼―季貞―季重」、『季兼、実武蔵住
人横山党横山党小野盛兼子也」

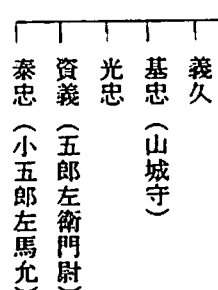
「顯定弟頼定―忠能(改「義忠」、本間右馬允、母横山新大夫小野孝兼女、初関
東居住、住「頼朝公)」

○海老名荻野系図 季兼(基兼、実武蔵人横山新大夫小野盛兼子、有兼無子、
故養「外孫季兼」、令「統」其家)―

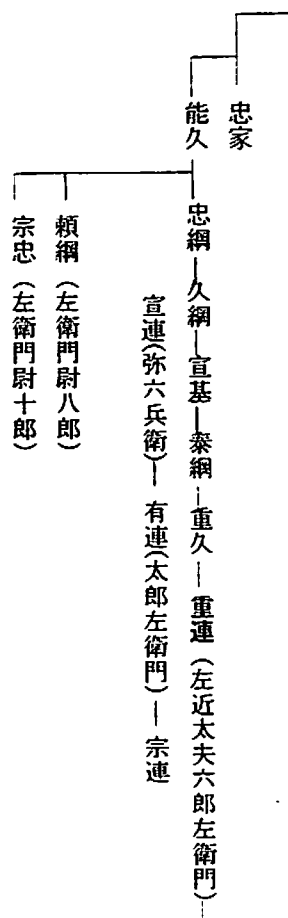
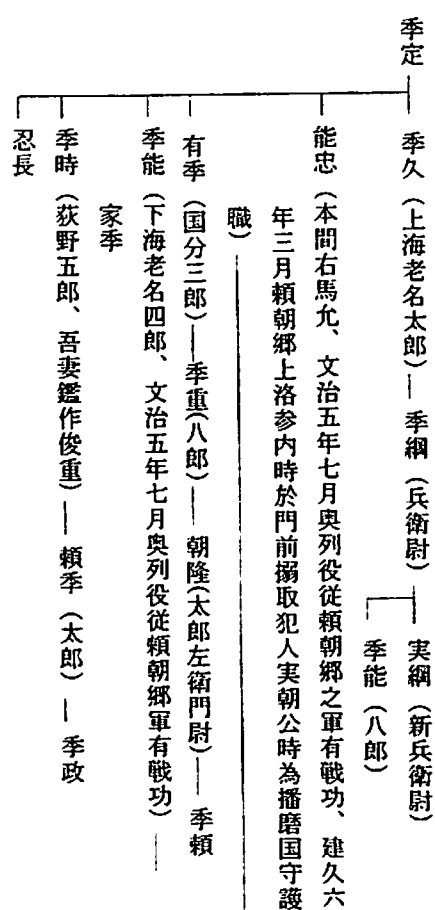
季定―能忠(本間右馬允)―



○小野氏系図「横山義隆―義兼―盛兼―季兼―季定(海老名権守)―義忠(本
間右馬允)―



○本間系図



佐渡【春日氏族、海老名氏流】
能忠の子忠家の弟能久の後裔。

有宗は頼朝の安倍貞任・宗任討伐軍に加わり陸奥守となる。その子有兼は相模守に任ぜられ海老名郷に住す。有兼は横山党の横山盛兼の子を嗣子とした、これが海老名源太郎季兼である。

本間が名をとつたとみられる本間は海老名に地名がないが、海老名郷の南の恩馬郷によつたかもしれない。その南は大庭御厨で恩馬はこれに続く牧場であつたとみられる(『厚木市史料調査報告書』)。天正十八年(1590)四月、豊臣秀吉、恩馬郷四か村に禁制を下し、軍勢甲乙二人らの濫妨を禁ずる(『海老名市史』)。「風土記」の記載では、本郷村、恩馬郷と唱う、正保国図に恩間本郷と記し、元禄の改に本郷村と載せ、古は恩間村と傍記す、杉窪、上・中河内の三村は皆当村より分折せし地なり。

季兼の子が季定(吾妻鑑は季貞)で六人の男子があつた。

船来田明神社 祭神不明。倭名類聚抄に船田の郷名があるが厚木村にも同名がありどちらが原社か不明。杉山将監弘政の勧請という。往古は村の鎮守という(『風土記』)。縁起(嘉永二年)では仁治(にんじ)元年(1240)、東の相模川と西の中津川が村の南で落合、川中島ともいうべきだが、上水通路がなく米穀が乏しいので、領主の本間六郎左衛門尉重連は鎌倉幕下士の杉山将監弘政に伺い、杉山水視の壇、藤塚ともいう段に堀溝を掘つたが数日後に大地震により壊れた。弘政は奇異を感じ小舟に乗る薬師瑠璃光如来を彫り敬った。重連もこれに帰依し村鎮護の神として尊崇し像を安置し船来田大明神とした。村民とともに水路を掘り中津川の水は田を満々と潤し豊穰をもたらした。重連は自ら奉行となり仁治二年(1241)二月上旬から船来田大明神の宮殿造営を始め、仁治三年春に本社・拝殿・廊・中門・鐘楼・宝蔵・惣門・鳥居が全て完成した。二月二十日に祭礼を予定したが泰時が病氣により卒去(六月)したため延期したが、翌年將軍頼経も隠居となり政情不安が続いた。ようやく寛元三年(1246)六月

二十日祈禱祭礼が行われた。元龜年中(1570-1572)に武田信玄と北条氏政合戦の際に金田村から酒井村辺まで陣を構え戦つたが、武田は不利となり火を放ち宮殿、鐘楼、宝蔵皆焼失した。しかし、御神体は遙かに飛び去り、水路開発の後に村民が火種の側に植えた小松の下に杉山将監零社と呼ぶ石宮を建てたその松が三百三十二年たち大木となつており、その枝に止まった。すぐに仮宮を遷座した。今般釣鐘再造を發願した次第であり、喜捨を乞うものである。釣鐘の願文は、大檀那泰時・重連、別当神禪寺権大僧都大越家阿闍梨典盛、治工荻野住木村正秀など。

風土記は祭神は不明とするが、皇国地誌は豊玉姫命(トヨタマビメノミコト)とする。明治四年(1871)神社明細書上帳では豊玉比咩命、但し勧請年記不詳とある。海神、豊玉彦命の女で海宮を訪れた天津彦彦火火出見命アマツヒコヒコホデミノミコトと結ばれて鶴草葦不合命ウガヤフキアヘズノミコトを生む。ホホデミはコノハナサクヤビメがニニギとの間に産んだ、ホデリ、ホスセリ、ホワリの三人の子の末弟で山幸彦とも呼ばれる。豊玉姫命の妹玉依姫命はウガヤフキアヘズの子、神日本磐余彦命カムヤマトイワレビコを生む。後の神武天皇である。

棟札 ①元禄十二年(1699)二月吉日 別当神禪寺 大工和田与兵衛 高60.6
㊦、下幅27.7㊦、上幅29.3㊦、②明和七年(1770)十一月朔日 当社別当導
師船来山神禪寺現住秀盛 興津伊勢守・小河甚左衛門 大工棟梁桐生長五郎
及川村高木藤右衛門、小室平蔵(図11①) ③高30.5㊦、下幅23.0㊦、上幅
22.0㊦、享和四年(1804)二月二十日 興津能登守様、小河惣左衛門様 名主
飛鳥田増次郎、飛鳥田隼吉、星野万右衛門(図11②) ④文政三年(1820)三
月吉祥日 荻野村大工柳田武八

神主安本昇は、船来田明神社別当神禪寺の玄浄長男寛順で、嘉永四年(1831)
大峯山登山をし、安政四年(1857)神禪寺住職となる。維新に伴い明治二年六
月復飾し(神祇職)安本主水と名乗り、厚木神社植松疎に入門し、明治四年六
月安本昇と改名する。明治十二年(1879)十二月二十四日没。現在毛利氏。明
治元年十一月に改名復飾願が出ている。「安本主水 船来田明神社別当神禪寺改名

神主宮本傳情」 葦山県御役所宛て

神仏分離令 明治元年三月十七日「神祇事務局ヨリ諸社へ達」を初見とする明治政府が發布した一連の布達を総称している。

明治元年（慶応四年）三月十七日 別当、社僧に還俗を命じる。

明治元年（慶応四年）三月二十八日神仏判然令 御神体の仏像、本地仏、鐸口、梵鐘は取り外すこと。

明治元年（慶応四年）閏四月四日 別当・社僧還俗の上、神主・社人の称とす。

明治元年（慶応四年）閏四月十九日 神職と家族の神葬祭を命ず。

明治四年五月十四日 官社、諸社に分けそれぞれ大中小社格を定める。官社は官幣社・国幣社に、諸社は県（府）社・郷社・村社。のち村社の独立、村社の下に無格社を置く。

神社合祀 明治末期に内務省神社局が主導して全国的に実施された合祀政策。全国で約十九万社の神社が十二万社に、無格社は半減した。維新政府の神社を国家の宗祀（そうしたつとんでまつること）と位置づけ指向した国家神道教化政策は後退した。当初神社合併は神社崇敬の高揚のためであったが、行政市町村の団結強化のための施設と位置付けられるようになり、一町村一社への合祀と名称の町村名への変更も行われた。神社が行政の一つの施設と捉えられていった。

勅命二百二十号 明治三十九年八月九日 神社寺院仏堂ノ合併ニヨリ不用ニ帰シタル境内官有地ハ官有財産管理上必要ノモノヲ除クノ外内務大臣ニ於テ之ヲ其ノ合併シタル神社寺院仏堂ニ譲与スルコトヲ得

御嶽社は往古は村鎮守、石仏を神体とする。地蔵の如し、裏に延宝四年（1676）とあり。神禪寺持。村の南の字御嶽にあつたが明治初年に金田神社に合祀。石造阿弥陀三尊「延宝九年（1681）酉三月吉日 相州中郡金田村」（『風土記』『市史史料集1』）

第六天社は村持、村の東屋敷にあつたが明治初年村落神社合祀の際に金田神社に合祀されたが、昭和六年に再度旧地に遷座したという伝承あり（『市史史料集1』）。

秋葉社 享保六年七月 願主奉造立秋葉宮 小河久重（『のだち』）

金刀比羅社 祭神、大物主神

神禪寺は船来山の山号、当山修験、本山は三重県伊勢市の世義寺（せぎでら）。船来田明神社別当、中興開山は典盛（享保十八年（1733）六月二十二日卒）

明治三年十二月金田村明細帳 氏神船来田明神祭礼六月二十日より五日の間神主安本主水と最寄り神主三、四人宛雇って執行。社地二反歩は村持、六反六畝歩も村持だが、これは雑木山で明治二年から年貢上納を命じられている。中津川通建徳寺下に長さ三十五間、横四尺の板橋を十月から三月までかけ、夏秋は船で渡す。同じく松原通小鮎川に板橋長さ十五間、横四尺あり。

坂樋は中津川通り牛久保下に長さ四間、横六尺五寸、建徳寺下に長さ二間四尺、横七尺あり。家数は九十九戸で平民が九十五戸、神主一戸、寺院三戸。人別は男三百十人、女が二百八十三人、合計五百九十三人。神主安本主水は家内六人、妙純寺は五人で下男二人、建徳寺は四人、長泉寺は建徳寺が兼代

船来田明神社の縁起では用水溝を整備した杉山将監弘政が、藤塚に溝を掘ったところ大地震により壊れたことを奇異を感じ、小舟に乗る薬師瑠璃光如来を彫り敬った。また、音を同じくする京都の貴船神社は、雨水を掌る神で雨乞・止雨の神とされた。祈雨・祈晴は天長十年（828）から始まり、祈雨のときは黒馬を、止雨祈晴のときは白馬を献ずるのが古例であった（『国史大辞典』）。船来田明神社には神宝として白黒の翁面が伝わり、雨乞いにはこれを中津川に沈めるといふ。中依知浅間神社では梵鐘を相模川に沈めるといふ（『厚木市文化財調査報告書第拾集』）。いずれも水に係る伝承が多いことが認められる。

下依知村 天保二年（1831）では、旗本蜂屋領、犬塚領・森川領、近藤領（本家・分家）、幕府領の六給、寺社は八幡社、第六天社、稻荷社、吾妻社、神明社、山王社、熊野社、御嶽社、広徳寺があり、鎮守は中依知の浅間神社。村内八社は全て村持、広徳寺は曹洞宗、東水山、三田清源院の末寺。開山は清源院八世の格雲守存（寛永十一年（1634）三月十四日卒）、中興は実参探牛（寛政七年（1795）五月三日）。墓地に室町から戦国期の五輪塔、宝篋印塔があり（図12）、附近で

は四点の板碑が出土、延文元年(1356)十月、永和年号(1375~1378)を有する。

天保三年(1832)の下依知村の村高は、幕領(江川太郎左衛門支配)二石七斗八升五合六勺、森川鍊三郎知行三十五石一斗一升二合六勺、犬塚平右衛門知行九石一斗三升、近藤氏知行八石、蜂屋七兵衛知行百石、計百五十五石三升九合二勺。小名に中依知村にまたがる牛久保あり、堂(道)満坂あり。

吾妻坂古墳 中期古墳、四獣形鏡(図13)、豎櫛、劍、鉾、太刀、鉄鏃、玉類が出土。直径45~55cmの円墳(推定)。

中依知村 天保二年(1831)では、旗本岡部領、小幡領、幕領の三給。寺社は浅間社、稲荷社(浅間社末社)、金毘羅社(浅間社末社)、秋葉社(浅間社末社)、白山社(安龍寺境内社)、天神社、御嶽社、山王社、安龍寺、蓮生寺、薬師堂、道心庵、浅間社は中・下依知村鎮守、熊野・赤城社合祀で別当は安龍寺。安龍寺は東泉山、清源院末寺、開山は清源院六世玉山智存。蓮生寺は宝塔山、中山法華経寺末寺。開山は日蓮、本間重連の開基、中興は日源。小名牛久保は下依知村にまたがり三増合戦の時に「牛窪坂」とみえる『風土記』『市史社寺』。

大久根古墳 前期古墳、四世紀末から五世紀の壺形土器(図14)、一辺18~19cmの方墳。

浅間神社梵鐘(図15) 貞和六年(1356)三月、旧鎌倉大楽寺の鐘で、清原宗広が大工、願主は沙門公珍、大檀那は行珍。これが長祿三年(1460)に富士宮(浅間社)の法器となったことが追記されている。公珍は大楽寺開山、行珍は二階堂行朝、北条高時に仕えた後嘉暦元年(1326)出家行珍となる。文和二年(1353)尊氏上洛に伴う相伴にて落馬死亡。

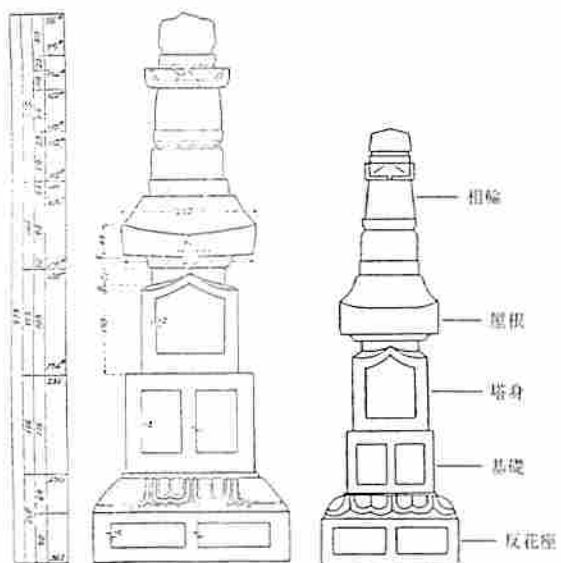


圖2 妙純寺 宝塔 本間重連供養塔 16C 末頃



圖1 牛久保用水 取水口

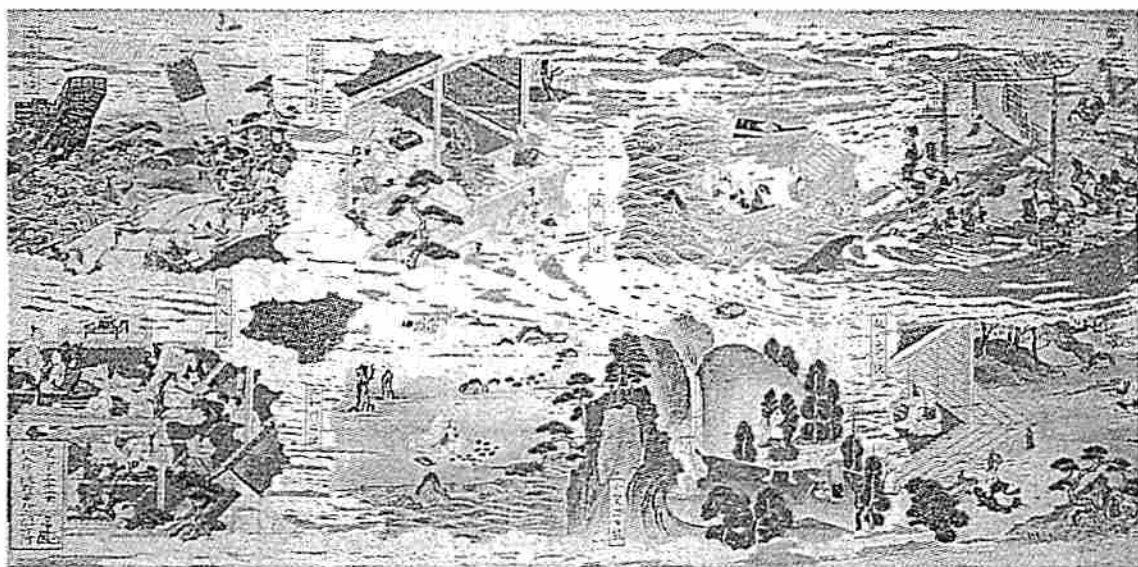
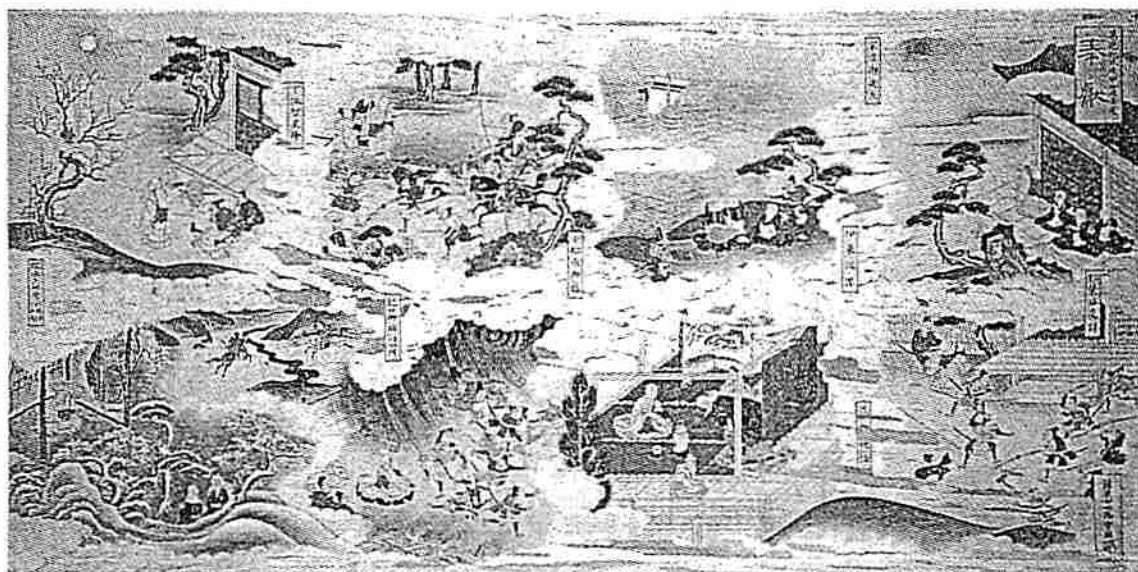


圖3 妙純寺 日蓮上人一代図会 近藤如水画 万延元年(1860)4月 佐野市右衛門(市郎右衛門)奉納

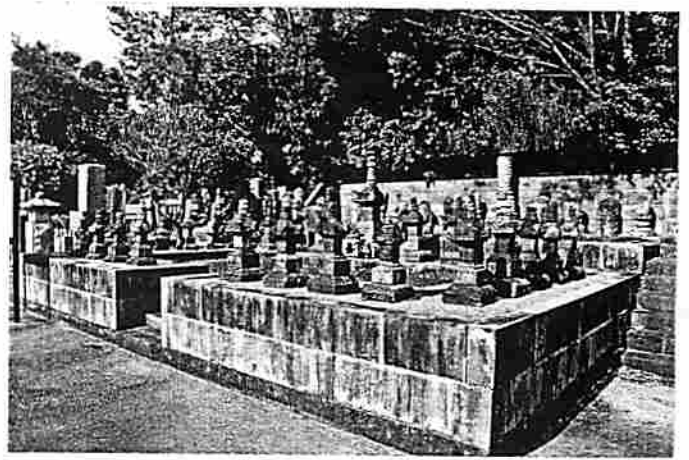


図4 建徳寺 本間氏累代墓

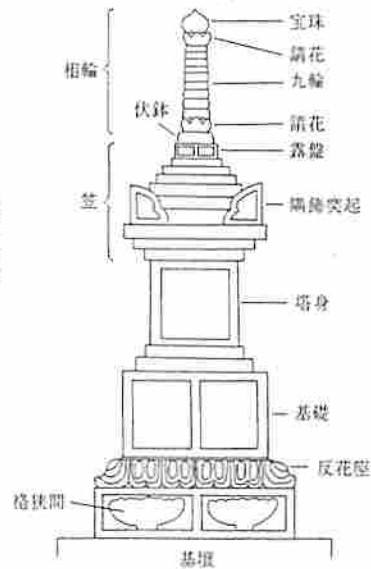
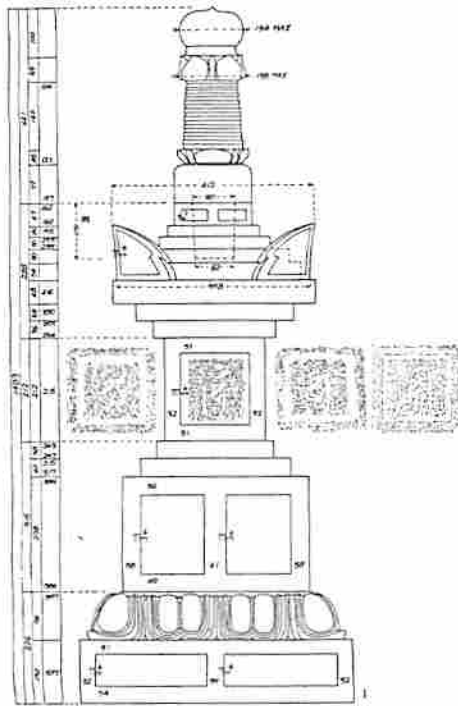


図5 建徳寺 本間氏累代墓 最大最古の宝篋印塔 南北朝中頃 総高 148.3 ㎝

胎藏界四仏の種子

金剛界四仏の種子



三田聖眼寺宝篋印塔塔身

金田建徳寺宝篋印塔塔身



図7 建徳寺

木造大興禪師坐像

図6 建徳寺

木造地藏菩薩立像



図 11-② 棟札 金田神社 享和 4 年 (1804)



図 11-① 棟札 金田神社 明和 7 年 (1770)

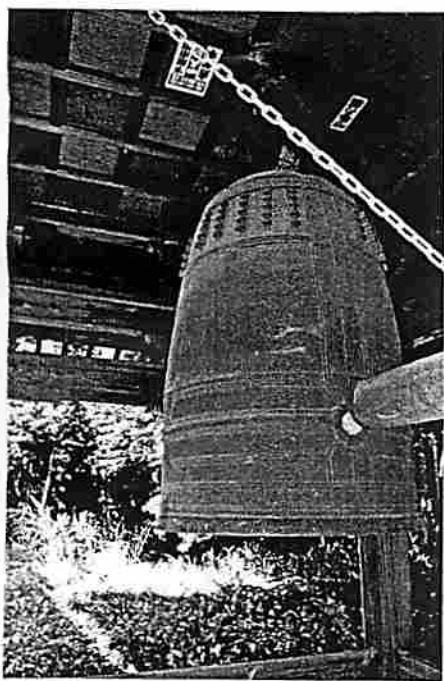


図 15 浅間神社銅鐘



図 12 広徳寺 中世石造物

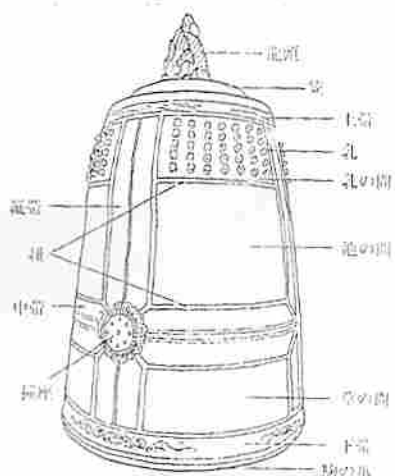


図 14 大久根古墳出土壺形土器



図 13 吾妻坂古墳出土 四獣形鏡 直径 19.1 釐